

いま、百年後の 未来にある酒

「日本最北の酒蔵」として知られるのが、増毛町の国稀酒造。
豪雪の暑寒別山系を背負い、かつてニシン漁で栄華を極めた浜のまちで、
130年に届こうとする歴史をつむぐ名門だ。
「国稀」の深く豪胆な味わいと切れのある飲み口は、
しばしば冬の日本海の厳しさと豊かさにとえらわれる。
そしてこの銘酒の樽の底からは、
創業者一族の、さらには北海道の大きな歴史潮流が透けて見えてくる。

谷口雅春 一文
text: Masaharu Taniguchi
露口啓二 写真
photo: Keiji Tsuyuguchi

家老家からの 伝説の輿入れ

一枚の写真からはじめよう。
大正末期に撮られた、若い夫婦
の肖像だ。夫は、「国稀」の創業者
本間泰蔵の長男、泰輔。妻は、キミ。
強い意志と静かな知性を秘めたよ
うな、キミの美しい面立ちに目を

引かれる。

彼女が泰輔のもとに嫁いだの
は、いまから百年前の1910(明
治43)年。春浅い3月のことだっ
た。泰輔25歳。キミ19歳。この写
真のキミは、30歳のころだ。
キミの旧姓は下国といった。松
前藩の家老職だった家系である。
松前一族や蠣崎家とともに松前

藩を支えた下国家は、先祖を津
軽安東家にたどることができる。
安東家は室町時代に分裂したが、
津軽半島の日本海側、十三湊を本
拠にしたのが下国家で、南部氏と
の抗争を経て15世紀半ばには蝦
夷地に進出。道南十二館のうちの
茂別館(現・北斗市)を本拠地と
していた。安東家をさらにさかの

ほれば、一脈は鎌倉幕府の蝦夷代
官にいたるだろう。

明治が明けるや新潟県の佐渡
から単身小樽に渡り、やがて増毛
で「丸一本間」ののれんを上げた
本間泰蔵は、呉服商やニシンの網
元、酒蔵、海運と幅広い事業を興
し、天塩国第一の豪商と呼ばれる
までになる。詳しくは後段にゆず



るが、彼は成功者の証のように、長男の嫁を名門から迎えることを願った。同様の例では、石狩で身を立てた井尻半左衛門が息子の静蔵に、当別に入った伊達邦直（岩出山伊達家当主）の次女加寿子を迎えている。

増毛に根ざそうとする商人にとつて、下国家から嫁を取ることには特別の意味があった。下国家は、松前藩の時代に増毛を治めていた有力家臣であったからだ。この地が歴史文書に登場するのは、18世紀初頭、下国茂季が知行していたころ。茂季はアイヌとの交易や漁業を、松前の商人、村山伝兵衛に請け負わせていた。

初代が起こした大店の後継者である泰輔は、会社の持ち船「太刀丸」を満艦飾にして七飯（函館）までキミを迎えに行った。浜にはおおぜいの見物人が幾重にも人垣をつくっていた。母港の増毛でも町中に好奇と期待が高まる中、勇躍帰還。すぐさま婚礼の儀と披露宴が行われる。宴は親族と店の顧客それぞれ別にもたれ、さらには使用人、出入りの手伝人、



1919（大正8）年ごろの本間一族と使用人たち。中央が泰蔵。その右がキミで、膝に抱えているのは、のちに点字図書館を創設する一夫。その右でメガネをかけているのが夫の泰輔

女中ごとにも席が設けられた。つまり盛大な披露宴が4日間で5回も開かれたのだ。

一方で明治の世は、松前の繁栄をすでに遠い過去のものにしていった。御家老家からの嫁入り道具ははたしてどれほどけた違いのものかと想像していた本間家の人々は、キミの持参品の、豪華ではあるが、あつけない少なさに驚いた。

百年前。かつての名門武家から北方奥

の源流は、泰蔵が1882（明治15）年に起こした「丸一本間」だ。泰蔵は1849（嘉永2）年、佐渡の西部、真野湾の奥の河原田諏訪町に生まれた。由緒ある仕立屋の三男で、明治元年には19歳。二十歳で単身島を出て、小樽に渡る。近江商人の松井呉服店に養子格の番頭として働くことになった。当時北海道の基幹産業は、江戸期からつづく日本海沿岸のニシン漁だ。なかでも厚田から増毛、留萌の好漁は目を見はるものがあり、泰蔵も小樽から増毛への行商に精を出す。

下船して荷を解く間もあらばこそ、とにかく商品を持ち込めば売れる繁盛ぶり。ならば、と泰蔵は1875（明治8）年にこの地に移り住み、独立を果たした。ちよつと小樽の主人が閉店を決め、泰蔵を見込んで店の商品をすべて3000円（米価換算でいまの210万円ほど）で譲り渡して



耐火性を備えた木骨石造の「丸一本間」呉服店舗。1902（明治35）年、増築部分の上棟式



「丸一本間」の新造船、留萌丸の進水式。1907（明治40）年の小樽にて

地の新興商家への興入れは、19歳のキミにとつていつたいたいどんな事態であつただらう。

本間泰蔵、増毛に立つ

いまから百年後に
わたしの詩の葉を 心をこめて
読んでくれる人
君はだれか――

1910年にベンガル語で出版された詩集『ギタンジヨリ』によつてアジアで初のノーベル文学賞を受けたのが、インドの詩人、ラビンドラナート・タゴール



厚田や増毛以北で最後の群衆（ニシンの大群の浜への寄りつき）があつたのは1955年。それまでは春の海にはこんな活気が満ちていた

くれたことがチャンスとなった。現在は国の重要文化財に指定されている、増毛町弁天町1丁目の石造りの店と住宅を構えたのはその7年後のこと。建物はその後増築を重ねていく。

呉服、荒物雑貨商として事業をスタートさせた泰蔵だが、1881（明治14）年にはニシンの漁業権も手にし、店を構えた82年に醸造業の届け出をしている。この時代のニシンの網元が生み出す利益は膨大であり、それが不動産や倉庫業など、のちの事業の原資となつていった。1887（明治20）年には海運業にも進出。積極的な投資を繰り返して、千ト近い鋼鉄船を含め通算12隻の商船をかかえた。最盛期には小樽の板谷汽船をもしのこうかという勢いである。

増毛山地を背後に抱え、南は厚田まで続く断崖絶壁。増毛への南からの出入りは古来、海からしかできなかった。そのため小樽を拠点にした日本郵船が海運を暴利で独占し、しばしば起こる欠航も人々を困らせていたのだが、泰蔵は増毛商人の意地を見せた

ルだ。彼が30代の青年期に書いた「百年後」（1896）は、このように始まる。

百年前の早春に本間家に嫁いだキミと、その6000キロ西で、世代は上だがほぼ同時代に生きた詩人。自然への畏敬によつて世界の外部までを探ろうとしたこの詩聖とキミには、直接のつながりはもちろん何もない。しかし19歳のキミの百年のちに暮らす人々が、彼女が夢見たであろう未来にどう生きていくかを考えるのは、意味ないことではないだろう。詩はまるで当時のキミの、不安と共にある心の日にまたに重ねてみたくなるようにこつづく。

いまから百年後に
君の家で

歌つて聞かせる新しい
詩人は誰か？
わたしは、その人に送る。
（森本達雄訳）

キミの義父、本間泰蔵に光を当てよう。現在の国稀酒造株式会社

のだ。彼の船は増毛・小樽間をはじめ、函館、新潟、佐渡、北は樺太にまで航路を延ばしていった。物資のほか道北への大量の開拓移民なども乗せ、さらに日清、日露の大戦による急激な物流の増加は、泰蔵に莫大な利益をもたらした。

長男の嫁となるキミを見いだしたのも、丸一本間合名会社汽船部の函館支配人である。跡取りに添わせたいと目をつけた令嬢がたまたま下国家の次女であつたのか、最初から下国家と知っていたゆえに縁結びに奮闘したのか。いまとなつては定かでない。

国に稀なる銘酒をめざして

先にふれたように、本間泰蔵から増毛郡役所に醸造許可鑑札が出願されたのは、1882（明治15）年。泰蔵33歳。丸一本間ではこの年を創業年としている。しかし抱えるヤン衆たちに飲ませるために日本酒の醸造をはじめたのはその3年前で、北海道でも初期の酒づくりだ。

この地にはなにより、豪雪の暑

特集 北海道の日本酒



国の重要文化財に指定された旧商家丸一本間家。往事を再現した呉服店舗。冬期は非公開で、春の公開は4月22日から

越後と越後を称して越佐という。泰蔵の出身地である佐渡やその対岸の越後は、17世紀から蝦夷地（松前）との物流がもつとも盛んだった地域だ。北前船は大阪から宗谷にいたる長大なネットワークだったが、蝦夷地向けの最大の商品は米や稲製品であり、産地の中心は越佐である。米が穫れない蝦夷地では米や酒の価値が高かったし、ニシン場で

などに比べて増毛の芸妓の芸達者ぶりは際だっていた。それだけ良質な客が多かったのだろう。戦争前の1940（昭和15）年ころ、建網の親方や羽振りの良い仲買人の祝儀は10円が相場で、売れっ子なら一晩で70円前後のチップを受け取った。いまの10万円ちかくだ。

芸妓や親方衆の着物をはじめ、髪結い、装身具、三味線、あるいは

越佐の松前稼ぎ

は書画、骨董、華道などの座敷のしつらえまで、まちには裾野の広い芸や芸術の文化が息づいていた。それはまた、ニシン漁に加えて呉服や雑貨、清酒といった泰蔵のマーケットにはかならず、出稼ぎのヤン集が故郷に携える「反物などのみやげの売り上げも、丸一本間の帳簿に記されたことだろう。

特集 北海道の日本酒

さて泰蔵が最初に作った清酒は書画、骨董、華道などの座敷のしつらえまで、まちには裾野の広い芸や芸術の文化が息づいていた。それはまた、ニシン漁に加えて呉服や雑貨、清酒といった泰蔵のマーケットにはかならず、出稼ぎのヤン集が故郷に携える「反物などのみやげの売り上げも、丸一本間の帳簿に記されたことだろう。

泰蔵は寄付金も募り、日露大戦を率いた乃木希典大将に揮毫を請うために上京する。面会がかない題字が下賜されたが、その短くも濃密な時間のなかで、泰蔵は乃木の人格に深い感銘を受けた。そして増毛に戻ると、乃木希典の「希」の一字を抱き「國の誉」を「國稀」と改める。「稀」を使つたのは、そのままではいささか不敬であると考えたのだった。

寒別山系が育む名水があり、江戸期から北前船の入港を増やしたのもこの水資源だった。米流通の動脈もある。商才に長けた泰蔵が、ニシン漁に沸くブームタウンで本格的な酒造に乗り出すのは当然ともいえた。故郷では杜氏にも事欠かない。やがて彼は持ち船を使つて、酒を天売、焼尻、利尻、礼文、樺太などにも行き渡らせた。

の銘柄は、「國稀」ではなく「國の誉」だった。1904（明治37年）。日本海を挟んで緊張の度を増していった日本とロシアのあいだで、ついに国運を賭けた激しい戦火が交わった。若い兵士が大陸へぞくぞくと送り込まれていく。旭川の第7師団もその一団で、寒さに強いことを見込まれた彼らは、12月の二百三高地の死闘の中軸を担った。師団には増毛町民も多く、おびただしい犠牲の果てに日本は勝利したが、戦後戦没者を弔うための慰霊碑を立てようという気運が起こり、泰蔵が発起人となった。

1899（明治32）年から1906（明治39）年の北海道清酒製造10傑のデータによると、丸一本間は毎年約180〜270キロリットルを出荷して、つねにベスト10内（北海道醸造技術研究会四十周年記念誌）。1902（明治35）年には、増産のために現在地に大きな酒蔵を新設している。この年丸一本間は、合名会社となった。また酒米を大量に扱うことは、米穀の大きな商いにもつながっていった。

明治の増毛は、押し寄せるニシンによって繁栄の一途をたどる。明治5年から10年にかけて、はやくもまちには宗谷支庁の出張所や開拓使の病院、郵便局、学校などが整えられていった。この地域が独立した支庁となると、庁舎は留萌ではなく増毛に置かれる。1897（明治30）年のことで、町制のはじまりは1900（明治33）年。その時代にすでに人口は1万1千人を超えていた。現在の倍以上の規模だ。さらに1911（明治44）年の「殖民公報」によれば、ニシンの時期の増毛への出稼ぎ者は8600人とある。

大正末の増毛には、置屋（芸者を差し向ける店）を兼ねた見番（芸者の斡旋事務所）が3軒もあった。まちには常時20名ほどの芸妓がいて、春のニシン最盛期には江差などから出稼ぎに来る者もおおぜいいた。俗にいう「かもめ芸者」。芸妓たちは小樽や札幌に出稽古することも多く、留萌

民のうち越佐の占める割合はきわめて大きい。明治25（1892）年から昭和の恐慌（1929年）まで、新潟県から北海道への移住者は毎年千戸、五千名以上に達した。『新潟県史』にある明治25年から30年間の統計では、本州から北海道への移住者が多い県のうちで、新潟は青森や秋田、富山を押さえて第一位。同書では北海道を、「海路の隣接県」であったと書く。

は漁具のほかに、縄やむしろ、吠、わらじ、ぞうりなどのわら工品や、ザルやかご、桶のタガといった竹製品の膨大な需要があった。越佐の商人たちは松前で店を借りてこれらを売りさばくほか、ニシン場への行商も積極的に行つた。彼の地ではそれを「松前稼ぎ」と呼ぶ。佐渡ではあまりに多数の者が蝦夷地に向かいながらつたので、金鉱山に支障が出るとして、幕府の奉行所は蝦夷地への渡航人数を村ごとに割り当てたほだだ。時代が下っても、北海道への移

越佐と蝦夷地との深い関わりを人物で追うと、明治以降に限っても、野幌に入植した北越殖民社のリーダー関矢孫左衛門や、百貨店丸井今井の創業者今井藤七、小樽の海運王板谷宮吉がいる。全道一の富豪といわれた函館の豪商相馬哲平、同じく函館を本拠地に日魯漁業を起こした堤清六などにも指を折るだろう。根室・千島の雑貨行商にはじまり酒造（北の勝）、缶詰製造で成功を取めた碓氷勝三郎も越後人だ。土木の世界では、伊藤組を起こした伊藤亀太郎がいる。本間泰蔵も、そうした越佐の大人の系譜につ



増毛の歴史を知るなら、國稀の蔵にもほど近いミュージアム「総合交流促進施設元陣屋」がおすすめ（増毛町永寿町4丁目49番地）



らなる人物だった。

越佐人に共通していたのは群を抜く勤勉節約や粘り強さ、とはよく言われるところ。とりわけ佐渡衆は泰蔵のように、強大な近江商人の権益をかいぐるり、体ひとつでニシン場を馳せ回ることによって利益を上げた。

キミが担うのれんの重責

泰蔵は商売の極意を、「金持ちになるための3角法」と言い習わした。成功への人生訓だが、それは「恥かく、義理かく、小股かく」というもの。こうでもしないと金は動かせないというのだが、小股かくとは、人の股をかいぐるるように機敏に行動せよ、ということ。

泰蔵は35歳で同じ佐渡出身のチエと結婚している。ふたりは2男2女をもうけたが、チエは長男が嫁(キミ)を迎える前の1908(明治41)年、52歳で亡くなった。泰蔵はまだ60歳前で、人生の全盛期。チエの弔いは、仮通夜と通夜で6日、葬儀に4日、葬式の行列は、百数人目によくやく位牌を抱いた長男と遺体を収

めた奥が並ぶという、空前の規模だった。

泰蔵は1925(大正14)年、76歳で隠居。晩年は日がな一日、蔵にしつらえた小さな二階で、心を尽くして集めた書や掛け軸などをながめていたという。1927(昭和2)年、78歳で劇的な人生の幕をおろした。

家督を継いだ長男の泰輔だが、キミとのあいだに実子はなく、一族も同じ屋敷に暮らしていたが、千代は一夫を生んだ翌年に亡くなってしまふ。さらに一夫は5歳のときに脳膜炎の高熱のために失明。その後函館盲啞院に学び、関西学院大学専門部に進んだ。1940(昭和15)年には、本家の支援を受けながら日本初の点字図書館を東京豊島区に開設。2003年に亡くなるまで、日本の点字や盲人生活器具の開発・普及に人生を捧げた。

キミは母ばかりか光までを失った一夫を我が子として育て、その行く末を案じつづける。花織さんは、後年名をなしてテレビに出ていた一夫を見てキミがよく泣いていたことを忘れない。

「晩年の祖母は不眠症気味で、寝る前に甘口の葡萄酒などを飲んでいました。学校が休みの前の夜、私はよくおばあちゃんの部屋に泊まってテレビの歌番組やアメリカのドラマ、『逃亡者』なんかをいっしょに夢中で見ていました。キミはいくつになっても、つねに新しいことに興味を持っていました」

初代泰蔵の次女千代には、一夫という一子があった。千代の家



酒造りが始まる前に杜氏をはじめとした職人たちが毎年祈願をする増毛蔵酒造神社。総櫓づくりの本殿の彫刻や天井絵も見逃せない(増毛町稲葉町3丁目)

た。家督を継いだ長男の泰輔だが、キミとのあいだに実子はなく、

族も同じ屋敷に暮らしていたが、千代は一夫を生んだ翌年に亡くなってしまふ。さらに一夫は5歳のときに脳膜炎の高熱のために失明。その後函館盲啞院に学び、関西学院大学専門部に進んだ。1940(昭和15)年には、本家の支援を受けながら日本初の点字図書館を東京豊島区に開設。2003年に亡くなるまで、日本の点字や盲人生活器具の開発・普及に人生を捧げた。

キミは母ばかりか光までを失った一夫を我が子として育て、その行く末を案じつづける。花織さんは、後年名をなしてテレビに出ていた一夫を見てキミがよく泣いていたことを忘れない。

「実子はありませんでした。キミは本間家の子どもたちをしっかりと育て、また本間家や下国家の縁者のめんどうを見ることに心を尽くしました。日本画家の仙田菱畝さんや能楽宝生流の今井泰男さんなど、芸術家への支援にも熱心でした」

しかしやはり出自は失せなかつたのだらう。外部からは、どこかクールな人と思われていた。



酒蔵の一角では、豪雪の暑寒別山系が育む国稀の仕込み水が味わえる

花織さんは、「やったことは本当に情の厚い人じゃなきゃできないことばかりなのに、愛情表現が少し下手だった。でも本間家にとつてキミはいまも心の柱です」と強調する。

酒こそ風土の精粹

酒飲みにはふたつの人種がいる。まず、銘柄や蔵元のスペック

よるばかりの不安定な北海道経済の中で事業をしいに醸造業と漁業に絞り込みながら、キミは昭和の波乱と激動の渦中、丸一本間ののれんを守りきった。

1968(昭和43)年。40代の働き盛りになっていた泰蔵の成長を見届けたように、キミは76歳の生涯を終える。世はおりしも「明治百年」の節目に高揚していた。

百年後のキミたち

丸一本間合名会社は、21世紀が開けた年に創業百年を迎え、林眞二現社長のもとで、国稀酒造株式会社へと法人変更を行った。泰蔵とその妻彌子なきあと、いま営業と広報の中心を担うのは、二人の娘たち。林花織さんと本間櫻さんの、取締役姉妹だ。

ふたりは幼少期にキミの晩年に接している。花織さんは、「祖母は自分の出自を決して忘れない誇り高い人だった」と言う。「動物好きで猫を何匹も飼っていたし、馬車を止めてよくニンジンであげていたけど、あれはどんな馬だったのかしら?」と3歳下の

特集 北海道の日本酒

を探索して、うまい酒を世界に求める人。他方で、自分の生地や暮らす土地にこだわりながら、世界に通じる酒を求める人。

地域の水や土、そして人や歴史と最も濃密に交わる日本の食といえ、日本酒に尽きるだらう。酒は風土のエッセンスであり、酒づくりは飲み手ひとりひとりの心と濃密に交わる特別な営みだ。だからスケールメリットを求めていく種類のビジネスとは、おのずと一線を画すことになる。すぐれたオーケストラが、本拠地の個性を自らの響きとして、長い歴史を費やしながら磨き上げていくように、良質な日本酒は、その土地の風土と民の精神から醸されていく。その酒が上質であればあるほど、オーケストラと同様に、土地の魅力を内側から世界に向けて力強く開いていくはずだ。

国稀では、道内でも早い時期に酒蔵の一部を一般に公開し、醸造現場での試飲や販売に力を入れてきた。きっかけは、1984年に国道231号がようやく全線開通したこと。これで札幌方面からの

●酒蔵でしか買えない國稀



右から
・國稀 純米酒 暑寒しずく 720ml 1584円
・國稀 暑寒美人 720ml 1000円

◎國稀の増毛で一献



●寿司のまつくら
北海道増毛町大字
弁天町1-22
TEL: 0164-53-2446
営業時間/11:00~21:00
定休日/第1・3月曜日

増毛に行って、地元の魚で國稀を一杯。そんな至福のひとつときはいかがだろう。本間櫻さんのいちおしが、國稀の蔵から歩いて3分のこの店。気っぶの良い大将を息子たちとおかみさんが支える、地元の人気店だ。すべて前浜で上がった海の幸が、素材を活かした刺身からひと仕事した逸品料理まで、幅広く楽しめる。驚くほど手軽な価格も、港まちならではの魅力。カウンター席で大将から、増毛の魚のうんちくを聞くのも楽しい。



右) 平目のえんがわ煮付け 525円
手前) ハタハタの一夜干し焼き物 840円
左) アワビの肝のしょう油漬け 315円
(國稀 鬼ころし まつくらラベル)



●國稀酒造株式会社
北海道増毛町稲葉町1丁目17
TEL: 0164-53-1050
http://www.kunimare.co.jp/
酒蔵の公開・営業時間/9:00~17:00
定休日/年末年始のみ

「明治の時代に、かつての武家から商家へという、正反対の世界」

「過去は、現在がただ便利に使うことを許された道具ではない。ふたりの姉妹にとってのキミがいまの自分を確かめる鏡であるように、そしてタゴールが「百年後」でうたったように、過去はつねに現在を問い、願いを託しつづけるだろう。いまに生きる者は、それにどう応えていけば良いのか。



「過去は、現在がただ便利に使うことを許された道具ではない。ふたりの姉妹にとってのキミがいまの自分を確かめる鏡であるように、そしてタゴールが「百年後」でうたったように、過去はつねに現在を問い、願いを託しつづけるだろう。いまに生きる者は、それにどう応えていけば良いのか。

ちの強さなのだ。

「過去は、現在がただ便利に使うことを許された道具ではない。ふたりの姉妹にとってのキミがいまの自分を確かめる鏡であるように、そしてタゴールが「百年後」でうたったように、過去はつねに現在を問い、願いを託しつづけるだろう。いまに生きる者は、それにどう応えていけば良いのか。



酒蔵にある國稀の資料室。歴代の國稀の瓶やラベルなどが揃っている

100年前に松前から増毛に嫁いだキミの仕事を受け継ぎ、國稀酒造の広報を担う本間櫻さん。「櫻」という名前は、祖母のキミがふさと松前を偲んでつけたという

特集 北海道の日本酒

「過去は、現在がただ便利に使うことを許された道具ではない。ふたりの姉妹にとってのキミがいまの自分を確かめる鏡であるように、そしてタゴールが「百年後」でうたったように、過去はつねに現在を問い、願いを託しつづけるだろう。いまに生きる者は、それにどう応えていけば良いのか。

「過去は、現在がただ便利に使うことを許された道具ではない。ふたりの姉妹にとってのキミがいまの自分を確かめる鏡であるように、そしてタゴールが「百年後」でうたったように、過去はつねに現在を問い、願いを託しつづけるだろう。いまに生きる者は、それにどう応えていけば良いのか。

◎國稀の増毛で逸品みやげ



・にしんの千石漬 (身欠にしん) 735円



・生数の子 (増毛前浜産) 2100円

●すが宗
北海道増毛町稲葉町1-8-1
TEL: 0164-53-3540
営業時間/9:00~18:00
定休日/不定休
濃昼(ごきびる) 茶屋を閉めた菅原豊さんが春から秋まで営業する寿司の名店。入魂の加工品は、冬でも買うことができる。

